

Title	教育方法学研究室 2018年度提出の修士論文・卒業論文要約
Author(s)	
Citation	教育方法の探究 (2019), 22: 128-146
Issue Date	2019-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/241672
Right	許諾条件により本文は2020-03-26に公開
Type	Others
Textversion	publisher

論文要約

提出者氏名	栗崎 慎太郎	指導教員	主	石井英真	副	西岡加名恵
論文題目	<p>仲本正夫の数学教育実践に関する検討</p> <p>—「書くこと」の意義に着目して—</p>					

【論文内容の要約】

本稿では、仲本正夫の数学教育実践について検討する。仲本は埼玉県私立高校に勤務し、微分積分の本質を重視した授業を行うとともに、青年期を生きる生徒たちが数学を学ぶことを通して人間としての自立を果たせるように実践を創造した数学教師である。

仲本は教師1年目から教職員組合の設立活動に関わり、その中心的な人物として活動した。教師の要求を守るために戦うなかで生徒の権利と要求に目を向ける大切さに気づき、それらを意識した実践を希求するようになった。また、遠山啓の著書との出会いを通して、微分積分の本質を教えることに目覚めた。

一方で、組合活動の中心にいた仲本は学級担任から外され、生徒との人間関係は希薄になっていた。仲本はその状況を打開するために教科新聞「数学だいきらい」を発行し、上田町子という生徒と出会った。この出会いをきっかけに仲本は「書くこと」を自らの実践に様々な形で取り入れていくようになった。さらに、生活綴方教育から書いて表現する実践の素晴らしさや生徒を捉える視点を学び、数学教育に「書くこと」を取り入れていくうえで新たな示唆を得た。

こうして仲本は「本質重視」と「書くこと」の2つの柱で支えられた実践を展開した。仲本の実践記録である『学力への挑戦』が世に出ると、学習意欲が低下していた時代にも関わらず、生徒たちを授業に惹きつけ、微分積分の内容をほぼ全員に理解させたうえで学ぶことの意義を生徒たちにつかませた実践として高く評価された。

仲本の実践に関する先行研究としては、本田伊克、金子章予、田中耕治のものが挙げられる。本田、金子はいずれも、仲本が当時の社会情勢を乗り越え、数学に対する負のイメージを払拭した点に実践の意義を見出しているが、そこで論じられているのは数学の教材の工夫や本質を重視した各実践への評価が中心で、実践全体を貫いて取り入れられていた「書くこと」のもつ意義への言及がなされていない。一方で田中は生活綴方との関連を指摘し、「書くこと」で引き出した生徒の本音が仲本の授業改善に用いられていたことには言及しているものの、生徒たちにとって「書くこと」がどのような意義をもつものであったかは十分に検討されていない。

本稿では、仲本の実践が「本質重視」と「書くこと」の2本の柱に支えられていたという立場に立ったうえで「書くこと」に着目し、数学教育に「書くこと」を取り入れる意義について明らかにすることを目的とした。

仲本は微分積分の本質を教えるために自作のプリント教材で授業を行っていた。生徒の既成概念を揺さぶりながら授業を進め、公式が生み出された過程を重視してそれらを生み

出した人類の進歩を生徒たちに追体験させていた。数学発展の歴史は人類が発展してきた歴史でもあるため、それを追体験した生徒たちが数学を学ぶなかで人類の素晴らしさにもふれることを目指していたのである。

こうした仲本の実践において、「書くこと」はまず、生徒たちをより確かな理解へ導く役割を果たしていた。生徒たちは、「小説づくり」を通して数学で学んだ内容を現実世界の具体物と結びつけて考えることができ、「北海道への手紙」や「微積分ノート」で学んだ内容を再構成して個々の要素同士のつながりをつかむことができた。

次に、「書くこと」は生徒が自己を認識し、他者との関わりのなかで成長することを促す役割も果たしていた。生徒たちは授業での経験を言葉で表現して意識化し、そのうえで「数学だいきらい」を通して他者の感想と交流することで自らの感想を客観視できていた。そこで生じる矛盾や葛藤を乗り越えることが生徒たちを成長させる契機となっていたのである。そして生徒たちは、1年間の学習を「私の数学 12 年」で 12 年間の学習史のなかに位置づけて振り返った。過去の自分との関わりのなかで今の自分を捉えることで自己の変革を認識することができていたのである。

さらに、「書くこと」は教師が生徒をより深く認識し、生徒の視点から自らの実践を問いなおすことを支える役割も果たしていた。生徒が書いた感想文は生徒自身が自らの認識を深めるだけでなく、仲本の授業に対する生徒からの評価としての側面ももっていた。また、継続して行っていた「数学だいきらい」の発行は教師である仲本自身が「書くこと」を実践する場となっていた。仲本もまた「書くこと」を通して生徒に対する理解を深めていたのである。

以上のように、仲本は数学の授業でありながら論理的な証明文などを書かせるのではなく、小説や手紙などのある意味で数学らしくない形式で「書くこと」を取り入れ、生徒たちが学んだ内容をより深く理解できるように工夫していた。また、生徒たちが「書くこと」を通して他者との関わりのなかで自己を変革し、人間として自立していくように促していた。さらに、教師に対する生徒からの評価をアンケートなどで集めるのではなく、日々の学習のなかで生徒が書いた感想文から吸い上げていた。仲本の実践の独自性はこれらの点から見出すことができるだろう。仲本の実践における「書くこと」は、「理解の深化」、「人格の形成」、「教師の変容」という 3 つの意義をもっていたのである。

論文要約

提出者氏名	澁谷 輝生	指導教員	主	西岡 加名恵	副	石井英真
論文題目	岡倉由三郎の英語教育論に関する一考察 ——新教授法における「読書力」の養成に注目して——					

【論文内容の要約】

本稿では岡倉由三郎(1868-1936)の英語教育論を検討した。明治期には制度的に学校で英語が学ばれていたが、近代化に伴う国際的な商業競争の武器として会話作文などの実用英語が希求されるなど、社会的要求に応じることが英語教育の目的であると自明視されていた。岡倉はそんな折に、英語教育の目的論を教育的視座からとらえ直した人物である。

岡倉は、中等学校という普通教育の文脈を踏まえて英語教育を論じ、英語教育は「実用的価値」と「教育的価値」を兼備しなければならないとした。当時の教育学では、教科の知識技能を学び、その上でそれを活かして精神修養を行うという考え方が一般的であり、岡倉の唱えた二つの価値はこの考え方に基づいていた。岡倉の述べる英語教育の「実用的価値」とは、英語を媒介として読書を軸に海外の新しい知識や思想を摂取することであり、また「教育的価値」とは、「実用的価値」で摂取した知識や思想を材料に、言語・文化の相対性を知り、自らの思考力を養うことであった。岡倉は読書を中心とする「実用的価値」の実現を通じて、「教育的価値」が実現されると考え、これら二価値の実現の起点とも言える「読書力」を養成することが中等学校の英語教育の目標であると説いた。つまり、中等学校における英語教育は、「教育的価値」の実現を目的として、「読書力」の養成を目指すべきであるというのである。実務志向の会話作文が中心の実用英語が隆盛をきわめた時代に、普通教育という文脈において英語教育をとらえ、「読書力」の養成を重視した点に岡倉の特質があると言える。

岡倉は、英語教育の目的である「教育的価値」が、技能上の目標である「読書力」の養成に関係することを示唆している。しかし、岡倉の英語教育論についての先行研究では、岡倉の英語教育の目的論か教授法のいずれかの方に焦点が合わせられており、「読書力」そのものについての検討はされていない。そこで、本稿においては、岡倉の「読書力」とは何かを明らかにすることで、「教育的価値」と「実用的価値」の関係を問い直した。これを通して、岡倉の英語教育論の再評価を試みた。第一章では、岡倉が英語教育を説いた史的背景を確認し、彼の位置づけを行った。明治中期、訳読式の教授法への批判と実用英語の必要から、教授法の改善が希求された。岡倉はこの時、音声重視の「新教授法」を説くと同時に、英語教育の目的論を問い直したのであった。

第二章では、岡倉の英語教育の目的論を検討し、英語教育の目標の中心に「読書力」が定位されるまでの過程を見た。岡倉は当時の教育学を参照し、中学校の英語教育には「実用的価値」と「教育的価値」が兼備されなければならないとした。「読書」を軸

に海外の知識や思想を摂取する「実用的価値」を通して、言語・文化の相対性に目を開き思考力を養うという「教育的価値」の実現を目指したのである。「読書力」を起点とする「教育的価値」の実現は、あらゆる学生に「一種の素養を造る」という意味で普通教育の目的に適ったものであった。

第三章では、岡倉の英語教授理論から「読書力」の構造に迫った。音声重視の新教授法を説いた岡倉は、「読書」とは、書かれた文章を音声に復元し、談話の体として自らに読み聞かせることで原文の「心もち」に迫ることであると定義した。英語科の分科の中では、特に「読方」と「解釈」が「読書」に深く関わる。読方は、書き手がいかに語り得るかを発音抑揚を整えて再現することであり、解釈は、文全体の意味を斟酌して、その文で最も言わんとされている「心もち」を汲み取ることである。読方と解釈の両者は表裏一体の互助関係にあり、岡倉の「読書」とは、音声と意味の両面から原文の「心もち」に迫る行為であった。

この読方と解釈は反復の音読練習によってすり合わされ、最終的には一読して直ちに読方と解釈が完了する直読直解の域に高められる。再三再四の音読練習は外国の言語感覚や思考様式を理解するという「教育的価値」にもつながっており、またこうした理解は直読直解の「読書」を行う一助となるのである。つまり「実用的価値」の中心にある「読書力」に対して「教育的価値」からの還流があり、一方で「読書」によって「教育的価値」の実現も促される。「読書力」を介して「実用的価値」と「教育的価値」は互惠の関係を成しており、循環的に「教育的価値」が追及されてゆくのである。また直読直解の「読書力」は、読方など音声の側面と、外国の言語感覚などを理解する「教育的価値」の側面のいずれもを有しているため、岡倉において「読書力」は、音声重視の新教授法と「教育的価値」を目指す教育学の結節点であると言えることができる。

第四章では、岡倉の理論に基づいた実践として、広島高師附中の指導案を検討した。生徒に読方と解釈の両面から原文の意味を知らしめるために、教師が原文をパラフレーズした文章を読み聞かせるという方法が取られていた。これは岡倉の構想する「読書力」の養成に資する方法であると評価できる。一方で、「教育的価値」を実現するための教授法については指導案に詳述されておらず、実践のレベルで「教育的価値」と「読書力」の関係を検討することができなかった。具体的な教授方法の記述がないことから、実践においては「教育的価値」の実現は偶発的学習となっていた可能性が示唆された。この点を岡倉がどのようにとらえていたかを今後の研究で明らかにしたい。

論文要約

提出者氏名	三井 真吾	指導教員	主	西岡 加名恵	副	石井 英真
論文題目	平野武夫による道德教育論の意義と課題					

【論文内容の要約】

戦後の「道德の時間」が特設される前後に、独自の道德教育論を提唱した人物に平野武夫がいる。本稿の目的は、彼の道德教育論における意義と課題を検討することである。

平野は1927年より7年間、京都女子師範学校附属小学校で訓導として勤めた。その後、学び直しのため広島文理科大学にて哲学科を専攻し、卒業後の1941年から終戦までは、神奈川、青森、宮城の女子師範学校で教諭及び主事として勤めた。戦後は研究者に立場を変えて道德教育の興隆に努めた。その活動の一つとして、1950年に「関西道德教育研究会」（以下、「関西道研」と記す）を設立し、自身の道德教育論を広める場とともに、小中学校教師が平野の理論に基づいて実践した道德授業などを交流する場を築いた。

平野をめぐる先行研究には、戦後道德教育の政策的動向に彼を位置づけることで、平野の理論が道德観・道德教育観の本質的理解の次元において、全面主義道德教育と特設主義道德教育を統一的に理解するものであったことを明らかにしているものがある。しかし、この先行研究は、平野の授業論を基軸にして戦後道德教育における「道德授業」の原理に迫ることが目的とされており、平野の道德教育論の独自性に迫るには至っていない。

本稿では、第一に平野の足跡を辿ることで、彼が道德教育論を構築するにいたる問題意識を析出する。第二に、彼による道德教育論を整理し、「特設道德」に対して批判的な立場であった上田薫並びに生活指導論者と平野を対照させることで、平野の理論の独自性を検討する。第三に、彼の理論に基づいた実践の検討を通して、彼による道德教育の意義と課題を明らかにする。なお、本稿では「修身科」が行われていた時期を「修身期」、戦後の道德教育について、1958年までを全面主義に基づいた道德教育として「全面期」、1958年以降を「特設期」として設定する。

第1章では、平野が「修身科」を担当していた「修身期」、及び研究者として道德教育の興隆に努めた「全面期」の彼の足跡を辿った。彼は「修身科」に対し、絶対的な「教育勅語」を背景としながら、児童生徒の生活現実から完全に遊離した抽象的観念的な内容を、一方的に諄々と説き聞かせるだけの画一的な指導方法を批判した。こうした問題意識から、「全面期」当初、彼における児童生徒の生活現実を重視する経験主義に基づいたのカリキュラムに賛同した。しかし、自身が主導した「関西道德教育研究会」で小中学校の教師と交流を深めるにつれ、カリキュラムに内在する道德性啓培の契機が的確に把握されていない点に新たな問題意識をもつようになったことが明らかになった。

第2章では、平野による道德教育論を整理した。彼は、生活現実 に即した「価値葛藤の場」を自身の論の中核に位置付け、「全面」における「価値葛藤の場」と「特設」における

「価値葛藤の場」の克服に道徳性啓培の契機を求めることで、「全面」と「特設」を有機的に関連づかせた独自の理論を展開したのであった。また、彼の理論の独自性を明らかにするために、上田薫および生活指導論者の平野に対する批判的な見解を取り上げながら相対化を行った。上田は「徳目」と生活場面との乖離を指摘することで「価値葛藤」を批判したが、平野においては、上田の危惧は理論の前提のものとして組み込まれており、むしろその克服が目指されていることが解明された。生活指導論者と平野との比較検討からは、「生活指導」に対する見解の違いが明確化し、平野が企図する「価値葛藤の場」では、「集団」に位置づけられた「個人」が、「集団」の歴史的文化的なものに影響を受けながら価値を葛藤するものであることが確認された。これらの検討から、「価値」と「生活現実」との関係性、並びに「自己」と「集団」との関係性という実践を検討する視座が得られた。

これら二つの視座をもとに、第3章では、平野の理論に基づいた実践を検討することで、彼による道徳教育の意義と課題について検討した。ここでは、生活現実根ざした「価値」と「価値」が複雑に絡み合うことで作られる具体的な葛藤の場を通して、「価値」について、また、複数の「価値」間の関係性について思考されていること、「価値葛藤の場」における思考には、「徳目」を理解することにとどまらず、児童自身がそれを再構築することをも含み込んでいることが明らかになった。また、平野の理論が道徳問題の解決を個人の内省と静思のみ求めようとする、主観主義的観念論でないことが明らかになった。

以上を総括して、平野の道徳教育論には二点の意義が見出された。一点目は、「修身期」と「全面期」を経て道徳教育の難しさを自覚した平野が、一早く「価値葛藤」に着目し、それを基盤とした道徳教育論を構築したところである。二点目は、「価値葛藤の場」が、児童が複数の「価値」のはざまに立ちながら主体的に自身の言動を選び、その具体的な葛藤の中で、自他の経験をもとにしてこれまでの価値解釈を変容させていくものであったことである。一方で、戦後の道徳教育で一貫して議論的となってきた、「道徳性」と「認識」の関係性について言及されていない点、また、道徳教育において培われた道徳性が、いかにして行為行動として転移しうるかが、彼の理論においては十分に問われていない点が課題として提起された。しかしながら、後者は、筆者自身の研究方法上の問題でもある。すなわち、平野がこの課題にいかに関与したのかという問いに答えるためには、実践後の児童生徒の一連の行動を記した実践録や日記などを要するが、管見の限りそうした資料は見つかっていないからである。したがって、このような資料の蒐集は、筆者の今後の課題としても残されているのである。

論文要約

提出者氏名	森本 来希	指導教員	主	石井 英真	副	西岡 加名恵
論文題目	近藤益雄による知的障害児教育の思想と実践 ——三木安正との比較に焦点を合わせて——					

【論文内容の要約】

本稿では近藤益雄(1907-1964)による知的障害児教育の思想と実践について検討する。近藤は戦前における生活綴方教育での実践を背景に、戦後知的障害児教育の世界に実践の場を移して、知的障害児教育の萌芽期においてその発展に大きく貢献した人物である。

近藤が知的障害児教育に転換した 1950 年初頭における知的障害児教育の現場では、知的障害児の特殊性を積極的に認め、自立に必要な生活・職業能力を育成することが教育目的とされていた。当時の知的障害児教育を牽引していた三木安正(1911-1984)は、知的障害児の発達限界性から卒業後の中度・重度知的障害児を社会から「分離」することを前提とし、相応の職業的能力・態度を開発・育成することに教育目的を限定していた。

近藤もまた当時の知的障害児教育の潮流や三木の影響を受けていたが、将来の「分離」を否定し、「人間」として生きることを念頭に、すべての子どもたちの「共生」とそのための社会変革を目指した。さりとて近藤は、知的障害児の通常学級への統合は否定し、あくまで特殊学級での集団の保障により彼らが関係性を創造し、主体性を伸ばしてこそ、社会において「共生」できると考えていた。つまり彼は、戦後の障害児教育における「分離／統合」の二者択一的な図式を「人間」という視点から乗り越え、「分離」された障害児学級においてこそ将来の社会での「共生」が実現するという可能性を提起していたのである。

先行研究では、近藤の実践を貫く思想的特質が「発達保障」の観点から明らかにされ、カリキュラムや学習指導の面から多く検討されている。しかしいずれも近藤の原点にある「共生」の思想に焦点が合わせられず、彼の教育思想・実践が構造化されていない。上記の研究状況を踏まえ、本稿では三木安正との比較により、近藤による知的障害児教育の思想と実践を「共生」の視点から捉え直し、その意義と課題を示すことを目的とした。

第 1 章では近藤の戦前の歩みと戦後初期の知的障害児教育の潮流を概観し、近藤の位置づけを行った。戦後初期には、自立に必要な生活・職業能力を育成する「生活主義教育」が台頭した。背景には、障害の恒久性と発達の限界性を前提し、労働と人間の幸福を直線的に結ぶ三木の思想があった。三木はそれを前提に社会参加の道を分け、一般就労が困難な者には隔離された小社会での労働を目指して、相応の職業的能力の育成による社会適応と相応の「仕事」の保障を教育の目的とした。近藤は、三木の影響を受けつつ、戦前に培われた思想から知的障害児の発達可能性を信じ、社会から分離せずに「文化」の享受と社会での「共生」を「人間」の幸福として提起した点で、当時の潮流とは異なる立場にいた。

第 2 章では、第 1 章で明らかにされた三木との思想的な相違が生み出す近藤の知的障害児教育の方法論の独自性と論点を詳らかにするために、三木を参照した上で近藤の教育目

的、教育目標、並びにカリキュラムを検討した。三木が生活カリキュラムで職業的能力の涵養を目指したのに対して、近藤の教育目的はすべての子どもたちの「共生」とそのための社会変革であった。そこから「なかよくはたらく」ことを教育目標とし、作業学習において、人間関係の深化と社会性の涵養、子どもの主体性の育ちをねらった。さらにカリキュラムには教科学習が位置づけられ、人間関係の拡大という「共生」の側面のほかに主体的な生活のための「文化」の享受を目指していた。以上の検討から、近藤は「人間」として生きるための「共生」や「文化」を志向する点で三木と異なる方法論を有したことが示された反面、目標の射程や教科の可能性、社会の変革の実際をめぐって論点が残された。

第3章では、得られた論点をもとに近藤の知的障害児教育実践を検討した。作業学習の検討では、ともに働く中で育った関係性および主体性と職業的能力の連関及び特殊学級の外の社会との交流・変化が明らかにされた。だが交流・変化が組織的な展開に至らなかった点で課題を残した。教科学習の検討では、教科学習で得た生活の目標から、「文化」、「共生」、「仕事」へ展開し、「抵抗」にまで至った子どもの姿が確認された一方で、より重度の知的障害児に同様に保障できるのかという点は論点となった。最後に「抵抗」の側面を掘り下げて検討した上で、「交流」と「抵抗」という二側面からの社会変革の効果を検証した。身近な環境の変化や安定して生活する子どもたちの様子が確認された一方で、依然差別的な感情を持つ地域社会や社会参加を拒むか、社会で不適応を起こす卒業生の姿も見られた。

戦前の経験を背景に、近藤は障害の有無に関わらず「人間」としての共通性から、すべての知的障害児が社会で「共生」ですることとそのための社会変革を目的に実践を行ったが、重要なのは、その近藤においても障害による差異を認め、学校段階では健常児と異なる生活の場を与える必要性を提起していたことである。彼は特殊学級における集団が個人と社会を繋ぐ意義を述べていた。さらに近藤が特殊学級で育てた「助け合い」の集団と「抵抗」の力は、従来の知能偏重の文化を転換し、皆の地域社会での生活を可能にする力を秘めていた。ここから「『分離』によって『共生』する」という新たな可能性を見出せよう。

一方で、近藤の思いとは裏腹に、「分離」したことでかえって差別を助長する危険性を孕むという課題も見られた。長年拒絶してきたキリスト教への入信およびコロニー建設計画から指摘できる近藤の思想的変質もまた、その課題に関連しているだろう。そして彼は最後には自死してしまう。彼を絶望させた課題の細部を明らかにすることが、「共生」の歩みを進めていく上では必要であるが、そのためには近藤の思想の変質の内実や、晩年の寮での実践を検討しなければならない。これらの検討を今後の課題としたい。

論文要約

提出者氏名	若松 大輔	指導教員	主	西岡加名恵	副	石井英真
論文題目	リー・ショーマンによる教師の力量形成論に関する一考察					

【論文内容の要約】

本稿では、教師教育改革をリードしてきたリー・ショーマン（Shulman, L.）の教師教育研究に着目する。ショーマンに関する従来の先行研究では、彼が 1985 年に初めて提唱した「教授学的内容知識（Pedagogical Content Knowledge: PCK）」に着目して、その意義や課題が示されてきた。例えば、課題として、コ克蘭（Cochran, K.）らは「[PCK の]知識(knowledge)」という用語はあまりに静的であり、構成主義的な見方とは一貫性がないと思う」と指摘している。このように、日本やアメリカにおける先行研究では、ショーマンの知識論を、「教授学的内容知識（PCK）」という用語で語ろうとしてきて、その中で批判も加えられることになった。そこで、本稿では、ショーマンの知識論を再検討し、ショーマンによる教師の力量の内実を明らかにすることを第 1 の目的とする。さらに、その知識論の構造から内在的に導き出されるケース・メソッドを検討することで、ショーマンが想定していた力量形成論の実際を明らかにすることを目指す。

第 1 章では、まずショーマンの教師像を明らかにした。ショーマンは、1963 年に教師の意思決定過程の研究で Ph.D. を取得したものの、1960 年代後半からは、医師の問題解決過程の研究を精力的に行うようになった。しかしながら、1974 年以降、再び教師研究に戻ってくることになる。このような経緯から、ショーマンは、医師とのアナロジーで次の教師像を描いた。すなわち、その教師像は、複雑な文脈を生きる「能動的主体」や「臨床家」としての教師である。

次に、このような教師像を抱いていたショーマンは、1984 年にシュワブの「実践的であること」に示されている教師像を「複雑で多くを要求されるアートの実践家」とであると解釈した。「アートの実践家」として教師を捉えた場合、ショーマンは、専門家の知識基礎として「ルールの知識」「特定の事例の知識」「ルールを事例に適用する方法の知識」という 3 種類の「知識の形式」が求められることを指摘した。この枠組みが、ショーマンの知識論の核心である。初めて知識基礎を示した 2 年後の 1986 年の論文は、従来の研究では「教授学的内容知識（PCK）」を初めて提唱した論文として広く知られているものである。しかしながら、1986 年の論文は、1984 年の専門家の「知識の形式」を発展させて、専門家としての教師の「知識の形式」を提示したものとして捉えることができる。この論文では、上記の 3 種類に対応する形で「命題的知識」「事例的知識」「方略的知識」から成る「知識の形式」が提示された。「命題的知識」と「事例的知識」は、「教授学的内容知識（PCK）」や「学習者の知識」などの「知識の領域」の存在形式である。そして、「方略的知識」は、シュワブの「アート」概念をモチーフとするもので、自身の知識を変革させる手段であると

考えられていた。1980年代半ばの知識に焦点化していたショーマンによる教師の力量は、知識を働かせて「教授学的推論と教授学的行為」という授業づくりを遂行する能力であると捉えられていた。重要なことは、「方略的知識」によって、教師の知識は、変容可能な動的な枠組みであると考えられていたことである。さらに、この「方略的知識」を伸長させるために、事例を用いた力量形成論であるケース・メソッドを想定していたことである。

まずショーマンの事例に対するスタンスは、他の専門家教育から着想を得て事例に注目した時期から、実践事例を読むことに主眼を置いていた時期へ、さらに実践事例を書くことに主眼を置いた時期へ変遷したと言える。事例の定義づけは、この時期区分に対応して深化していき、最終的には、事例とは「物語性」と「文脈性」を有する典型的なナラティブであり、「意図」「偶発」「判断」「省察」という構成要素をもつものであるという認識に到達した。

事例を書くことに主眼を置いた時期に、ショーマンは、事例を用いる力量形成論を「＜分析―構築―コメント―共同体＞サイクル」として定式化した。この背景には、経験から省察的に学ぶという「省察的实践家」像の受容と、以前より高度な授業が求められていてそのためには命題的知識だけでは十分でなく事例的知識を豊かに身につけなければならないという認識があった。この力量形成は、他者の事例を読み、事例の構造を把握して、自身の経験を選択と概念化によって事例化し、それを他者に開示して自身の実践を見つめ直すサイクルである。この力量形成論は、事例を読むことのみが想定されている他の専門家のケース・メソッドとは異なり、教師の世界に独自の方法論であると言える。事例を読み、書き、公にするというサイクルを定式化したことは、従来優れた教師や教師集団が暗黙裡に行っていたことを明示化した点において意義深い。

1990年代に展開した事例論を踏まえると、教師の力量の捉え方も、1980年代半ばから変容してきたと言える。教師の知識の中でも事例的知識が前景化し、それに伴って、教師の力量は、具体的なイメージを伴う事例的判断の能力であると考えられた。この事例的判断力は、一般的原理から演繹して判断するのではなく、特定の事例から類比的に判断する能力である。このような事例的判断は、アカデミズムとプロフェッショナルリズムの二項対立に回収されないパースペクティブを提示する点において示唆に富む。しかし、ショーマンの力量論には、この力量としての判断力が授業前の構想力なのか授業中の意思決定力なのか不明瞭である点と、知識が豊かになれば行為もよりよくなるという前提に立っていて知識と行為の関係性には議論の余地がある点は、課題として残されている。

論文要約

提出者氏名	Curtotti Rohan Lucio	指導教員	主	石井先生	副	西岡先生
論文題目	L.コールバーグによるジャスト・コミュニティの理論と実践					

【論文内容の要約】

本稿は、ローレンス・コールバーグによるジャスト・コミュニティの理論と実践を検証することが目的である。ジャスト・コミュニティは子どもの道徳的エンパワーメントを基盤に置く教育方法である。コールバーグは、道徳的認知と道徳的行動のずれに焦点を当て、子どもが自律的に生活環境の変革を起こすことを目指した。

本稿の第一の目標は、コールバーグの理論の進化を整理することである。先行研究の異なる立場を比較し、コールバーグが最終的に構想していた正義と慈愛の調和を意味する「人間尊重の原理」をまとめた。

第二の目標は、日本や海外の先行研究のジャスト・コミュニティに対する批判点を分析し、ジャスト・コミュニティの課題から道德教育に対する示唆を明らかにしようとするものである。ジャスト・コミュニティの長所を中心に論じる荒木寿友の先行研究がすでに行われているため、彼が触れなかった課題を明らかにし、ジャスト・コミュニティにまつわる議論に貢献したい。

本稿は第1章でジャスト・コミュニティの理論整理を試みる。第1節では、ジャスト・コミュニティの理論的・実践的背景を概観する。第2節では、正義とケアは対立概念ではなく、「人間尊重の原理」において統合されていることを論じたい。第3節では、その統合に必要とされる対話を分析し、それが支配行為や相手を操る戦略的な行為から自由でなければならないこと、そして、それが真理を探究するプロセスでなければならないことを主張する。

第2章では実践記録に基づいた批判的検証を試みる。第1節では、ジャスト・コミュニティの組織の一部である規律委員会を取り上げ、それが人間尊重の原理の観点からの問題を含んでいることを主張する。第2節では、ジャスト・コミュニティにおける権力の在り方について論じ、権力を「人間尊重を実践する権力」へと生徒の認識変革をしなければならないことを提案したい。そして第3節では、真理探究としての対話能力を概説し、それを権力問題の解決の一部として考察する。

ジャスト・コミュニティの理論と実践は、道徳的認識と行動に焦点を当て、個人とコミュニティの道徳的発達とエンパワーメントに関する示唆に富んでいる実践である。本稿は道德教育、そして生活指導の理論的・実践的研究への貢献を目指すものである。

論文要約

提出者氏名	浅川 裕子	指導教員	主	西岡加名恵教授	副	石井英真准教授
論文題目	高等学校におけるキャリア教育に関する一考察 ——「産業社会と人間」に焦点を合わせて——					

【論文内容の要約】

本稿では、高等学校におけるキャリア教育の「適応」志向を批判する形で提示された、「抵抗」と「解放」概念について検討する。「抵抗」概念は、2000年代に本田由紀や児美川孝一郎らによって提示されたもので、職業に応じた知識や能力を獲得する「適応」概念に対して、人間的な働き方ができるような職場づくりを行うための労働法等に関する知識や能力の獲得を求めるものである。一方、「解放」概念は、被差別部落等、社会的諸差別を受けてきた人々が、差別を生む社会構造を自覚し、差別からの自由や諸権利の回復を達成しようとするものである。2000年代半ばに桂正孝をはじめ、部落解放・人権問題研究所の研究者らによって、「解放」の実践の実績を活かしたキャリア教育の構築が求められた。

2000年代以降、「抵抗」の立場では、児美川によって、大阪の部落解放教育の伝統をもつ高校を含む進路多様校での事例研究が行われ、「解放」概念への接近が見受けられる。一方で、「解放」の立場では、桂ら以降、キャリア教育に焦点を合わせた研究は少ない。また、桂の研究でも、キャリア教育の具体的な内容や方法は明らかにされてこなかった。

そこで、本稿では「解放」概念を、「抵抗」概念と対比しながらキャリア教育史に位置づけるとともに、「解放」の教育の伝統をもつ、高等学校におけるキャリア教育の実践を検討することを通して、高等学校におけるキャリア教育の実践への示唆を得ることを目指す。

まず第1章では、高校教育改革とキャリア教育の史的展開の中で、「抵抗」と「解放」の論点を浮き彫りにする。「抵抗」の立場は、労働法等の知識の獲得のみならず、権利行使の主体になるための力量形成の必要性を論じ、シティズンシップ教育との有機的結合を求めた。他方、「解放」の立場は、部落解放教育の中で継承されてきた、生徒や家族、地域社会の生活現実と運動の歴史から学ぶという視点や、働き抜くために生徒の学力や労働能力の質を問うという視点を、キャリア教育の構築に活かすことが求められた。また、2000～2010年代かけて、菊地栄治が、解放教育の伝統を持つ総合学科の高校の事例研究を行い、産業社会への順応を克服しようとする実践の知見を導き出してきたことが明らかになった。

第2章では、菊地の調査対象校で、原則履修科目「産業社会と人間」の実践の検討を行う。実践の検討から、「解放」の実践がキャリア教育に与える示唆として、(1)生徒の生活実態に根差した教育内容の選択や当事者との対話の経験は、生徒の当事者意識の形成や、自己と社会との関連の自覚、課題認識の深化に資すること、(2)「解放」概念に包含される、課題解決に向けた行動変容を促す取り組みが、生徒に、自らの進路希望の実現に向けた行動変容を促しうること、(3)社会問題に関する学習と科目選択を併行することで、生徒は自らの問題意識と、職業や進路希望に自覚的な選択を行う傾向があることが明らかになった。

論文要約

提出者氏名	大西 真央	指導教員	主	西岡 加名恵	副	石井 英真
論文題目	青木幹勇による国語教育の理論と実践					

【論文内容の要約】

本稿では、「第三の書く」を提唱した青木幹勇に着目し、青木の理論・実践を整理するとともに、その背景にあった青木自身の問題意識や国語教育観についても考察する。青木の理論・実践についての先行研究として大内善一による「国語教師・青木幹勇の形成過程」がある。大内は「いかにして青木が『第三の書く』提唱に至ったか」という観点で要素ごと・時系列ごとに整理しているが、「その背後にあった青木の国語教育観、問題意識、国語教育で目指したもの」についてはあまり触れられていない。そこで、本稿では、「第三の書く」提唱に至った青木の根底にある思想も明らかにしていきたい。

第1章では、大内の分析に従って、青木が「第三の書く」提唱に至るまでの流れを整理する。続いて、青木自身の教育観、問題意識、国語教育で目指したものについて考察する。その次に、青木のそうした国語教育観に多大な影響を与えたとされる芦田恵之助からの影響について詳述する。青木が芦田から受けた影響として、大内は『『書く』ことをより子どもの主体的な学習を引き出すものとして積極的に授業に活用しようとした』という分析を行っている。青木の問題意識から鑑みるに、「教室内の“皆”」を学習に引き込もうという意識もここから生まれたものであると考えられる。

第2章では、「第三の書く」の理論と、そこで学習の基礎活動として組織された「視写」の活動について概括する。「第三の書く」とは「視写」「聴写」「メモ」「書込み」など、他の「聞く」「話す」「読む」活動と並行して行われる、多様な「書く」活動を組織化したものである。青木は、こうした「書く」活動を子どもたち全員の主体的な学習を支えるための基礎力として活用するためには、「視写」を活用した「筆速の育成」が重要であると主張した。

第3章では、「第三の書く」における「書替え」の実践と、その前身である「書足し」の実践を比較しつつ、その内実を大内の分析に沿って検討していく。「書足し」の方法では物語のストーリーをなぞりつつ、物語を文脈に沿って確かに読む姿勢が引き出され、「書替え」の方法では、物語のストーリーを把握したうえで登場人物になりきり、「自分だったらどうするか」と自己に引き付けて想像を働かせて読む姿勢が引き出されている。このことが、主体的に読む・学ぶ子どもの育成を意図した青木が「書替え」を「第三の書く」の総合段階に位置付けた理由の一つであると考えられる。

以上のように、本稿では青木の理論「第三の書く」を、その背景にある国語教育観と結びつけつつ検討してきた。これらの考えをもとに、現代における国語教育を構想するにはどのようにすればよいかについての考察は今後の課題としたい。

論文要約

提出者氏名	金子岳史	指導教員	主	石井	副	西岡
論文題目	東井義雄の教育論の展開 —「生活の論理」に着目して—					

【論文内容の要約】

本稿では、戦前から戦後にわたって、生活綴方の立場に基づいて教育実践を行った教師である東井義雄の戦後の教育論の展開について、子どもを育てるために重要視すべきであると主張し提唱した「生活の論理」に対する考えの変遷をたどりながら考察する。従来の先行研究では東井の「生活の論理」観の変遷について実践とのかかわりから検討はされていなかった。そのため本稿では、東井がどのような時代背景、社会問題、人物の影響を受けて、教育論を展開させたかを検討し、さらに東井の実践を通してその教育論と目的意識の変化について明らかにする。

第一章では東井が「教科の論理」と「生活の論理」を主張するようになった過程と当初の定義について検討した。また、「村を育てる学力」と「生活の論理」のかかわりについて検討した。東井は遅進児学級の女の子であるモリタミツにカタカナを教える中で「生活の論理」と「教科の論理」の両方を踏まえなければ子どもの学力は伸びてこないことに気付く。この頃東井は「生活の論理」を子どもの「生活段階」とであると認識していた。

第二章では東井が唱えた「生活の論理」は「子どもの心理」と同義であるという批判を受ける中で、「生活の論理」観がどのように展開したかについて検討した。東井は教育学者である勝田守一らの助言を受けて、「生活の論理」は地域や家族や環境に深くかかわるものであると、その定義を明確化した。また授業とは「教科の論理」を主体化している「教師」と、「生活の論理」を武器とする「子ども」との対決であることを主張した。

第三章では「村を育てる学力」の敗北と当時の社会状況を通して東井の「生活の論理」観と教育の目的がどのように展開したかについて検討した。東井の母校であり、「村を育てる学力」の原点である相田小学校が廃校になり村が荒廃していったことを受けて東井は「村を育てる学力」が敗北したと痛感した。その中で東井は「生活の論理」を手段として利用するだけではなく、「生活の論理」自体を教育の目的として高めていく必要性を主張した。1970年代になると、青少年の非行や自殺といった社会問題を「生活の論理」に引きつけて考え、教育のあり方について問題提起した。このように社会状況の変化を受けながら東井の教育論は展開したが、教育の第一義が子どもであること、子どもが主体的な学びができるよう授業において「生活の論理」を大切にすることに関して一貫性を持続けた。

以上のように、本稿では東井の教育論の展開について明らかにした。本稿の課題としては、「村を育てる学力」や教育評価に関する東井の教育論の批判を「生活の論理」「教科の論理」の思想との関連性から検討できなかったことである。東井の提唱した二つの論理がこれらの批判とどのように関連していくのかについては私の今後の課題としたい。

論文要約

提出者氏名	小森 真人	指導教員	主	西岡 加名恵	副	石井 英真
論文題目	三藤恭弘による「物語の創作」学習指導					

【論文内容の要約】

本論文の目的は三藤恭弘による「物語の創作」学習指導に関して、国語教育における従来の物語創作の研究との比較を通して、その有用性と指導方法の特徴を明らかにすることである。三藤の功績を先行研究において位置づけることを通して、現在における日本の国語教育における物語創作の到達点と今後の課題点について考察する。

第一章では、物語創作指導の先行研究における三藤の位置づけを試みる。三藤の指導の特徴はそれ以前の先行研究で明らかにされた有用性を折衷させた点であり、物語創作によって想像力／創造力を高めることで人間形成を行いながら、同時に人間の本質の認識、さらに自己と他者を取り巻く状況の認識によって、自己を反省的に捉える、文学的認識力を育成しようとする点に特徴があると考察した。

第二章では、三藤の創作指導理論について、文学的認識力の観点から検討する。三藤の特徴は、子どもたちの認識世界は現実及び虚構も含んだものであり、それを認識する有効な手段として物語創作を重視し、現実と虚構の「往環運動の力(想像力)」によって認識力がさらに発展するものとして捉えた点にあることを明らかにした。

第三章では、指導方法の特徴と生徒の作品を分析し、三藤の指導の特徴が読解解釈や物語創作のための基準となる枠組みとして物語の「型」を重視した指導であることを明らかにし、実際の生徒の作品においても「型」の指導によって文学的認識力を効果的に伸ばした根拠が見受けられた。

三藤の功績は、発達心理学と物語創作の先行研究の知見に基づいて、国語教育における物語創作の有用性とそれに理論づけられた指導方法を示した点にある。戦前から戦後の長期において、物語創作は事実に基づかないため、物事の本質をとらえる価値発見の学習ができないと有用性が否定されてきた。しかし、三藤は「虚構」も「現実」と同様に子どもの認識対象に含む重要な要素として捉え、「虚構」を「現実」と対比させることで、文学的認識力が育成される有用性を示した。とくに三藤のオリジナルな視点としては、文学的認識力は発展的に進化していくものであるとし、それは「型」を重視した読解学習と創作学習を往還的に繰り返すことによって、子どもたちの中にある「スキーマ」を強固なものにしていくと捉えた点にある。

しかし、三藤の物語創作指導に関しては課題が残されている。文学的認識力は発達していくものとして捉えたが、発達に応じた物語創作のカリキュラムをどのように構築していくかは明らかにされておらず、そのカリキュラムの開発のためには、文学的認識力を構成する各要素であるスキルがどのように発達していくのかについて検討する必要がある。

論文要約

提出者氏名	小柳 亜季	指導教員	主	西岡 加名恵	副	石井 英真
論文題目	言語教育の目的論に関する検討 —大津由紀雄の「ことばへの気づき」に着目して—					

【論文内容の要約】

本稿は大津由紀雄（1948-）の「ことばへの気づき」の教育を中心に、英語教育の言語教育としての目的論について検討したものである。言語教育のように、国語教育や英語教育を連携させる発想は岡倉由三郎が最初に提起した。岡倉は国語教育を土台として英語教育は行われるべきだとしている。岡倉の述べた連携の形は国語教育から英語教育に対して一方向的なものであった。それに対し石橋幸太郎は国語教育においては求心的教養、英語教育においては遠心的教養が身につくとして両者の相補性を強調している。ただしこの求心的教養、遠心的教養は具体性に欠けるという欠点があった。石橋の論をふまえ森住衛も言語教育のあり方について検討している。森住の論は言語の普遍性に着目した点で意義があったが、教養主義の視点のみに留まってしまうことにその限界があった。

また、言語教育という体系については石橋が国語教育と英語教育を包括する形で提唱しており、国語教育と英語教育の相違点をいかに教育において位置づけるのかが不明瞭となっていた。一方、垣田直巳が言語教育について論じた際は英語教育固有の領域とは対置する形で、他のことばの教育と共通する普遍的な領域として言語教育は位置づけられた。しかしながら、垣田はその具体的内容については述べていなかった。

垣田の枠組みのように、大津の言語教育はことばの普遍性に着目しているものであった。大津の「ことばへの気づき」の教育は、全ての言語に共通して存在しており、母語を通して無意識に知識として持っている文構造や文章内の修飾関係、文体などについて意識化させる。このことによって、ことばの「運用」能力を育てることを目的としている。「運用」という概念は、ことばを発することのみならず、相手への考慮や、ことばの用い方を意識化し省察することも含む概念である。

「運用」にはこれまでの「教養」と「実用」という二項対立を総括する可能性がある。これまで英語教育の目的論は岡倉由三郎が提起した、「実用」と「教養」の二項対立によって語られてきた。現在ではこの「実用」と「教養」は岡倉が定義したものから変化し、「実用」は主にコミュニケーションにおいて用いられる、スキルの側面を重視したもの、「教養」は国際理解や人格形成などの側面を重視したものとして語られる。近年においては学習指導要領の変遷や産業界からの要請により実用的価値が重視されてきているが、実用的価値が持つ限界を乗り越えるために実用的価値と教養的価値を結びつけるものが必要とされている。大津の「運用」能力は、自身の持つ言語知識という、これまで非スキルの「教養」とされてきたものを用いて、ことばを発するところまでを含めている。この点で大津の論はこれまでの「実用」「教養」を二項対立的ではなく総括的に捉えることができている。

論文要約

提出者氏名	仲 和志	指導教員	主	石井英真	副	西岡加名恵
論文題目	横地清の数学教育論 —「量」の指導に着目して—					

【論文内容の要約】

本稿では、戦後の教育改革の中、数教協や数実研に属し、子どもの認識から出発した実践を通して研究を進めた数学教育研究者である横地清の数学教育論とその実践を検討する。

戦後、アメリカ占領軍の要請による教育改革の中で行われた生活単元学習であるが、生活経験重視という方針に対して、知識の体系の寸断や学力低下といった生活単元学習批判が巻き起こった。その後、数学教育の現代化が進み、遠山啓を中心とした数学教育協議会などによって教科の系統を重視した教育が重視されるようになった。そのような時代において、単なる生活経験への回帰ではなく、数学を学ぶ中で高次の概念を獲得すること、そしてそれを実生活へ活かすことの双方を目指し、日本全国のサークル団体と協力しながら実践を通じた研究を進めた人物が横地清である。

第一章では、横地の理論と実践を検討する枠組みを得るために、遠山啓を中心に数教協の数学教育論を整理し、横地と遠山の間で起こった量の指導を巡る論争を扱うことで、子どもの認識に関する主張と量の指導方法という論点の抽出を行なった。横地は遠山の主張した生活単元学習批判に賛同して数教協に参加したが、やがて立場が対立したことから数教協を脱退し数実研を設立した経緯があり、両者の立場の違いを明らかにすることは横地の理論を検討するためには重要である。遠山は、子どもの認識には一定の法則がありそれを構造化させていくために、生活から離れたものであっても子どもが捉えやすい環境を教師側が作為的に作る重要性を主張した。これは、水槽というシェーマを用いた指導においても確認できた。一方横地は、子どもは学年や年齢によって異なる世界観を持っているとし、子どもの思考に即した指導を重視した。そのため、子どもが実感を持って捉えやすいものを出発とした指導方法を提案した。

第二章では、横地の数学教育論と彼の量の指導を検討した。横地は、子どもの知覚による現実的思考を次第に形式的なものにして高次の概念を獲得することを目指し、やがてそれを実生活へ活かすことを目指した。これが、横地が数学は社会的、実践的なものであると主張する所以である。また、指導の出発として現実の事物の側面を表す量を重視しており、実在の量的側面から量を抽出し、それを高次の概念へ昇華させたのち、周囲の事物を量で描写することを重視していたことが確認できた。

第三章では、横地が監修していた世田谷サークルの分数の導入部分における指導の実践を考察した。実在の量的側面から量を抽出する、現実的思考を言語形式で進められる形式的思考へ発達させていくという二つの横地の特徴が確認できた。一方で、現実的思考の段階、子どもの学年や年齢で異なる世界観の正体については確認することができなかった。

論文要約

提出者氏名	中来田敦美	指導教員	主	石井	副	西岡
論文題目	東基吉による保育論の検討					

【論文内容の要約】

本稿では、明治期に女子高等師範学校附属幼稚園の経営に携わった東基吉に着目し、幼稚園の位置づけ方という観点から東の保育論を検討する。東は遊戯を通じて幼児が自分の意志を実行しながら身体を健康を増進し道徳を身につけていくことを考案した。先行研究では幼稚園の位置づけ方という観点から東の保育論を検討することはなされず、遊戯を中心とした保育論の担い手として中村五六や和田実と同一視された。そこで本稿では、その観点より中村や和田の姿勢と比較しながら、東による保育論の意義と課題を明らかにする。

第1章では中村、東、和田の構想を明治後期における幼稚園と家庭の状況に位置づけた。明治期を通じて幼稚園保姆はフレーベルの思想についてよく理解しないまま恩物中心の保育を形式的に行っていた。また社会で幼稚園の必要性が認められたのは、使用人の存在や貧困によって幼児の発達が害されている場合か、エリート養成のための早期教育が求められる場合に限定されていた。そこで三者は、教育体系において幼稚園が占める地位を明らかにすることで、幼稚園の必要性を証明しようと試みた。

第2章では中村や和田の理論と照らし合わせながら東の保育論を検討した。東と和田の双方が中村と師弟関係にあり、三者はいずれも教育体系に幼稚園を位置づけることを目指していた。しかし中村や和田が将来の円満な発達のための基礎形成を目指していたのに対して、東は保育者の愛情のもとで自由かつ自然な生活を送ることの保障という視点から保育の意義を理解した。そこで東は、幼稚園保育において、知育の比重を小さくして身体養護と感情の陶冶を主とすることや、随意遊戯と共同遊戯という区分を撤廃して幼児を自由に遊樂させることを提唱した。家庭教育で用いられる方法を衆人教育の形式をとる幼稚園に採り入れることで、家庭教育から学校教育への円滑な移行がなされると東は考えた。しかし教育方法そのものを段階的に移行させていく筋道を示さなかった点に、東による保育論の限界があった。

第3章では「共同的の仕事」の構想と「家庭幼稚園」の構想をもとに東による保育論の具体像を明らかにした。前者は、幼児の自由活動と人間の本性を関連づけるフレーベルの考えを受容した一方で、幼児の本性を神的な靈性の発現とする見解を否定した東の姿勢を体現していた。後者には、親を最も自然な保育者と見做す東の考えが表れていた。

以上のように、本稿では東による保育論の意義と課題を明らかにした。本稿の課題としては、小学校教育に関する東の研究活動に焦点を合わせられなかったことである。小学校教育に対する東の考え方が、彼の保育論とどのような関係にあったかについては今後の課題としたい。

論文要約

提出者氏名	山田航太郎	指導教員	主	西岡	副	石井
論文題目	英語教育における語彙指導のあり方 — Paul Nation の所論に注目して—					

【論文内容の要約】

今日、英語科教育においては、いわゆる 4 スキル（リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング）の統合が重視され、また、特に高校レベルにおいては、原則英語の授業は英語で行うことが現行の学習指導要領で明記されるなど、英語科の教育方法は大きい変革を見せてきている。

2010 年改訂の学習指導要領においては、指導する語数を充実し、例えば、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」をすべて履修した場合、高等学校で 1800 語、中高で 3000 語を指導することとした。また、来たる 2020 年の改訂においては、4000～5000 語にまで拡充される見込みとなっている。このことから、学習者に対する語彙指導の重要性はますます高まると言える。

ここで、本稿では、語彙指導のあり方に問題意識を持ち、まず、日本における語彙指導についての研究や実践を確認する。そして、それをより発展させるために、英語教育および語彙指導について多くの研究を行っている、言語学者 Paul Nation に注目する。Nation は、とりわけ EFL すなわち外国語としての英語の言語習得について研究している言語学者である。彼の理論は、日本の語彙指導研究者の中で先行研究としてたびたび引用されるようになってきた。しかしそれらは、Nation の論説への糸口を示しているものの、その所論の一部を紹介しているに留まっている。

Nation を特徴づける 1 つの英語指導理論に、The four strands というものがある。Nation は、バランスの良い言語学習課程は 4 つのストランド (four strands) で構成されるもので、この 4 つのストランドのバランスを重要視している。これらは、meaning-focused input（意味に焦点を合わせたインプット）、meaning-focused output（意味に焦点を合わせたアウトプット）、language-focused leaning（言語に焦点を合わせた学習）、fluency development（流暢さの発達）の 4 つである。語彙の学習はこのうち 3 番目の language-focused learning に属する。そして第 1 言語としての英語学習者と第 2 言語としての英語学習者との間の明確な差異に基づいて、直接的な語彙指導の必要性に対する批判を乗り越え、この 3 番目のストランドにおける語彙指導の必要性を明らかにした。

さらに Nation は言語学者として活動するかたわら、自身で指導実践を行っていた。その実践記録は管見の限りないが、他の研究者の実践例を挙げ、単語部品に関する方略や文脈からの類推方略など、具体的な語彙指導例を紹介している。

本稿は、日本の英語教育の観点から、Nation の理論や実践を総合的に研究することを目的とするものである。